岐阜大学機関リポジトリ
Gifu University Institutional Repository

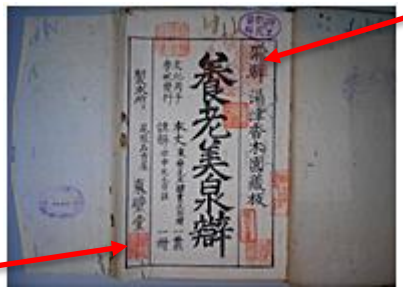
岐阜大学の古典籍（６）－本の袋が教えてくれること－

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 岐阜大学図書館 公開日: 2022-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/87737

岐阜大学の古典籍（6）本の袋が教えてくれること

教育学部国語教育講座准教授　小川 陽子

前回は、岐阜県養老郡養老町の美泉をめぐる江戸時代の論争において飛騨高山の国学者・田中大秀が自説をまとめた『養老美泉弁註』を取り上げました。岐阜大学の所蔵する『養老美泉弁註』（整理番号 090-57-40035）は出版された際の袋が本とともに残されているのですが、この袋は管見のかぎりでは『養老美泉弁註』唯一の残存例で、たいへん貴重なものです。今回はこの袋から得られる情報を見ていきます。



【写真3】

【写真2】

【写真1　袋全体】

『養老美泉弁註』は、従来、文化 12（1815）年 11 月に出版されたものと考えられてきました。それは、この本の序文に、「文化乙亥仲冬」と記されているためです。「文化乙亥」とは、文化年間の乙亥の年すなわち文化 12 年、「仲冬」とは、冬 3 ヶ月の真ん中すなわち 11 月を意味します。本から得られる情報の範囲では、たしかに文化 12 年 11 月に成ったものと判断するほかありません。ところが、岐阜大学本の袋には「文化丙子季秋発行」と明記されているのです。「文化丙子」は文化年間の丙子の年すなわち文化 13 年、「季秋」は秋 3 ヶ月の最後すなわち 9 月を指します。これにより、『養老美泉弁註』は文化 13 年 9 月に出版されたことが明らかとなったのです。

【写真2】

さて、連載第 1,2 回では書物の所蔵者によって捺された印に触れましたが、岐阜大学本『養老美泉弁註』の袋には、出版に際して捺された印も 2 つあります。まずひとつは、左下に捺された「永楽書屋」という朱印です。【写真2】これは、印のすぐ上に「製本所　尾張名古屋　東壁堂」と記載のある東壁堂すなわちこの本を出版した尾張名古屋の書肆・永楽屋東四郎の印と考えられます。

もうひとつは、右上の「飛騨」と「養（老）」の字にかかる位置に捺された朱印です。【写真3】丸の中に文字ではなく絵が描かれていますが、何の絵かおわかりでしょうか。絵の上部に小さな白い丸 7 つとそれを結ぶ線があり、その下には何やら人間のようなものが描かれています。これは、魁星印と呼ばれ、この岐阜大学本のように本の袋の右肩などに捺されるものです。小さな白い丸とそれを結ぶ線は七つ星すなわち北斗七星、その下にいるのは、実は人間ではなく鬼で、さらにその下には竜が描かれています。鬼と北斗七星の間には、鬼が蹴り上げた升も見えます。このように、竜に乗った鬼の上部に北斗七星を描く魁星印は、もともとは中国の出版物において用いられていたのが日本に入ってきたものと言われています。魁星とは、そもそも北斗七星の第一星をいい、文星・文昌星とも呼ばれます。文章を司る星・神とされたことから、書物に魁星印が捺されるようになったと考えられています。魁星印が鬼と升を描くのは、「魁」の字が「鬼」と「斗」（＝ます）から成っているからだそうです。古典籍は、書かれた内容はもちろんのこと、袋や印といった付随するものによっても、さまざまな情報や文化を現代の私たちに教えてくれるのです。

【写真3】